

共生社会構築の基盤となる自立心と危機管理能力を 江戸庶民の思考法ならびに行動様式に学ぶ

A study of independence mind and risk management that can become the base for realizing symbiotic society taking the thinking and the behavior patterns of the common people of Edo period into consideration. and Example for Proceedings of SSI Conference

◎山内 あやり
Ayari Yamauchi

一般社団法人日本江戸しぐさ協会 Japan Edo-Shigusa association

Abstract The purpose of this article is studying way of realizing the safest and the most secure symbiotic society in the world taking into consideration about problems of current situation of communication in the Internet Age. For this study, it is necessary to consider the way from the viewpoint of Socio-Informatic, especially thinking and behavior patterns of the common people of Edo period.

キーワード 共生, 自立心, 危機管理, コミュニケーション, 江戸

1. はじめに

本稿において、インターネット時代、とりわけスマートフォンによるウェブ上のネットワークが発達したことにより変容している現代のコミュニケーションの問題点を踏まえ、現在、崩壊寸前の共生社会の基盤を構築し直すために、個々の「自立心」ならびに「危機管理能力」を身につけることが基礎となると考え、そのために必要となる知恵とその方法論を、約265年間、如何なる地域からも侵略されず平和と共生が培われてきたと認識される江戸時代の、とりわけ商人を中心とした庶民の思考法ならびに行動様式を取り上げることにより、現代に応用し活用しうる共生社会の構築に必要な糸口を得る。

2. インターネット普及により変容する社会と個人

インターネットの普及は、現在、社会構造を大きく変容せしめ、産業構造にすら決定的な変容を強要している。例を述べると、「5年後のトヨタの最大の敵はGoogle」という雑誌の記事が話題となっている。近未来の電気自動車ならびに自動運転システムの普及により、自動車産業は解体再編の憂き目を見る可能性が、情報化とAI化の進展により現実味を濃厚にしているということである。

日本国内におけるスマートフォン(以下スマホ)のユーザー人口は8000万人を超え、日本人の2/3が所持している現状は、明らかに日本人の行動様式に大きな変化を促す。情報空間は地球規模に拡大しグローバル化している一方で、リアルな生活空間においては、スマホは個的空間に自閉するディスコミュニケーションとしての役割もはたすことになる。通信、検索、発信、情報交換、調査、拡張、ビジネス等の多様な機能は、単に人間の能力、身体能力の拡張ばか

りでなく、コミュニケーションの質を決定的に変容させている。リアルな生活空間における人間関係を閉ざしながら、なおかつグローバルにコミュニケーションを成立させることも可能である。

例を述べると、終日自室に閉じこもりゲームに没頭している者が、生活必需品をネットで注文し、宅配業者等に届けてもらうならば、生活にまったく支障をきたさないということである。スマホの普及は、高度なコミュニケーションと同時に個が閉塞しうるディスコミュニケーションをも成立させうるのである。便利なコミュニケーションツールによって社会的な関係性を解体させるという、はなはだ皮肉な現象も生起している。

日常のコミュニケーションにおいても、ブログならびに、ツイッター、フェイスブックなどのソーシャルネットワーキングサービス(SNS)が発達したことにより、相互間における知識や情報のやり取りが手軽に出来得る時代となり、他人との関わり方も多様化するなか、簡単に入手した知識や情報に対して、その真偽を自分自身で判断し、取捨選択する能力が必要となってくる。社会生活において実用的且つ甚だ便利であることから、一時的には有用であったと認識しても、自分の経験によって会得したものではない、そのような仮初の知識と情報は、真に重要な場面では応用がきかず、実践的でなく利便性が低いのである。

日頃から、五感を働かせることにより自分の力で思考し判断するクセをつけ、自分の言葉ならびに行動をもって示すこと、言い換えるならば、自らの意志により言動を起こす能力を備えることであり、このような自立心の育成は、共生社会を構築するうえでの基礎となると考える。昨今、個々における、このような最も基礎的な能力が十分に養われていない事實は、円満な社会生活を継続するうえで弊害を及ぼし

かねない、インターネット時代ならではの重要な課題である。

3. 自立心と危機管理能力の必要性

前述した「自立心」が欠如していることによる社会生活におけるの弊害について追及する。

これが意味することは、想像力且つ創造力が育まれていないことに起点がある。相手の心情を自ら思考し想像する力が欠如しているならば、その先には、いじめ問題やハラスメントなどのトラブルを生むことに発展しかねないという点で問題がある。一つの場面において、先々起こり得るあらゆる事柄を想像し、想定し、自らの判断によって言葉ならびに行動を生み出す（創造する）力が基礎となり、公私をわきまえ他者との関係性を理解していることは、相手の状況と心情を察し、相互にトラブルを未然に防ぐことが可能になるという意味で、危機管理の意味を成すことに繋がるのである。

例を述べると、ソーシャルネットワークワーキングサービス（SNS）などのインターネット上におけるコミュニケーションツールにおいて、一つの事柄を書き込み、画像等を投稿しようとする際に、実際にこのような文章ならびに画像を不特定の第三者に公開することによって、対象者ならびに閲覧者はどのような心情で受けとめ認識し、閲覧者が、その後どのような反応をし言動を起こすだろうか。その他、あらゆる状況を想像した結果、その投稿を実行するか否か、自らの思考による判断のもと選択しているということである。日常生活における危機管理の実践である。

社会生活において、まずは個人レベルにおいてトラブルが無く、日常的に安全を保持することが出来、安心を得ることにより、共生社会は構築されていくことになる。そのためにも、このような自立心の育成が礎となる危機管理能力こそが重要な要素となると考える。

インターネット時代ならではの現状を踏まえて、共生社会の構築に向かうべき方途をさらに模索する必要がある。

4. 共生社会とは

共生社会とは、「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である」という意味を有する。
※注1

共生社会では、リアルで実際的な人間関係の成立が前提となる。生活に必要な物資を共有するとともに、子どもや高齢者、病気や障がいをかかえる人を現実的に保護し、支援する社会システムを内包する。医療、教育の充実を図り、各人の衣食住を確保する仕組みを有することは絶対的な条件となる。

5. 現代社会における二つのベクトル

現代社会において、示唆するベクトルは二つある。

一つは、「新自由主義的なグローバル化」である。20世紀半ばまでは純然たる優位な位置づけを占めた国民国家の地位が低下し、代わって資本の強大な力をもって世界に席巻する多国籍企業が、国境を超えるヒト、モノ、カネの交通を容易にし、経済

社会システムを大きく変容させている。

一方、この反動としてのもうひとつのベクトルが、「保守的な民族主義の復活」である。このようなことは、単なる保守主義や民族主義への回帰というより、過度なグローバリゼーションによる人間疎外に対する反発によるものである。とりわけ国家主義的イデオロギーや国家に対する忠誠心を有するのではなく、低賃金の外国人労働者の大量流入による雇用不安による民族的差別が強く存在するものと推定される。

いずれの方向性も、決して適切ではないと考え、このような現況を打破するべく方法として、先人に学ぶべく、約265年もの間、何処の地域からも侵略されず、平和と共生社会が庶民により培われてきたと認識される江戸時代の人々、とりわけ商人を中心とした庶民の思考法ならびに行動様式を一つの見地として取り上げ、新たな方向性を示していく。

6. 江戸時代の庶民により構築された共生の概念 ※注2

江戸時代の庶民の生活における共生社会の概念として、自立した者同士の他者が互角に付き合うことを前提としている。江戸の言葉では「外つ国（とつくに）」と言い、外国、いわゆる江戸以外で生活する人々を示し、さらには、自分以外の他者とどう付き合うか「外つ国付き合い」を主題に、異文化との共生するための方法論を体系化した内容がある。そのなかで危機管理を念頭に置いた思考法と行動様式が数多存在している。これからその例を記述し現代における共生社会の構築について追及する。※2

7. 江戸庶民の思考法ならびに行動様式に危機管理を学ぶ

江戸時代の庶民の社会生活を指標に現代をより良く生きるための知恵として知られる例に、2004年の公共広告機構（現、ACジャパン）が推奨しマナー広告に採用された「傘かしげ」と言われるものがある。これは、傘をさした状態で他者とすれ違う際に、傘に付いた水滴で相手を濡らすこと、ならびに相手に傘の先が当たることによるケガを防止するため、人のいない側に傘を相互に傾け合う行動である。これをひとつの所作として捉えるならば、単なるエチケットと認識することが可能であるが、しかし、傘かしげは、その範疇に留まらず、着目すべきはこの所作に至る根底にある思考の在り方である。

この所作が意味するところは、他人同士であっても、危機感、不快感を持たないよう互いの心情を配慮することと一対に、無用なトラブルを未然に防ぐ為の用心から成る危機管理の挨拶であると捉えることが出来る。

同種の例として、「肩引き」「蟹歩き」がある。肩引きとは、狭い路地で人がすれ違うときに、咄嗟に相手側の肩を後ろに引いて、互いにぶつからないよう配慮する譲り合いの精神を示した所作のことである。蟹歩きとは、狭い空間ですれ違う際に、蟹の横歩きのように、体を横に向けてゆっくり歩き、接触によるトラブルを避ける心遣いの所作である。これは、

とりわけ江戸の商人が大きな荷物を持ち運ぶ時や狭い道を往来する際に、かかえている荷物を身体の横に持っていき、前方の視界ならびに足元を確認しながら歩行することを容易にするためであり、危機管理に重点を置いた歩き方の例である。

昨今は、スマホをしながら公道を歩く「歩きスマホ」により、前方への注意が散漫となり、不用意な他者との接触を頻繁に目撃する。電車内においては、背中に背負ったリュックが幅を取り、同乗者が迷惑していることにも気付かず、多くの他者に不快感を与えている人とその場面に遭遇することが頻繁にある。こうした時代であるからこそ、現実的な現実の社会生活に存在する人間関係の中で構築される共生の精神を、社会全体の課題として改めて見直す必要があると考える。

8. 江戸時代の銭湯に危機管理のコミュニケーションを学ぶ

火事が多発していた江戸時代の江戸の町では、殆どの庶民は家に風呂を所有せず、公共施設である銭湯を利用していた。当時の銭湯は（年代にもよるが）おおよそ朝方から夜まで営業を行っていたことにより、一日のうちに何度も湯につかる人もいた為、現代とは異なり社交場としての機能が発達し、それに伴い、暗黙のルールが存在していた。知らぬ者どうしが、裸で相対する公の空間において、互いに声をかけあうコミュニケーションは極めて重要な意義をもつ。

例を述べると、湯船に入るに際し「冷えてござーい」「田舎者でござーい」「ごめんなさいよ」などと声をかける習慣があった。これらは、皆で使用する湯船に自分の冷えた体が入ることにより、適温を保っていた大量の湯の温度を冷ますことになる為、申し訳ないという心情を起点にした言動であり相手への心遣いを示している。

同時に、自分を田舎者と謙遜することにより、同席する相手に威圧感、不快感を与えぬ配慮を示し、尚且つ裸同士の無防備な状況であることも踏まえて、無用なトラブルを防止するための挨拶の役割を含有していた。

このような、声かけ一つであっても、コミュニケーションを図ることにより、緊迫した空間は即座に緩和され、心地よい空間へと変化を遂げることが可能になる。江戸ならではのいきなはからいと言える。自主的にコミュニケーションを投げかけることにより、互いに危機管理の意識を高め、公共の場のルール、マナーの領域を超越した共生のための手立てとして実践されていた例である。

現代に置き換えるならば、世界屈指の治安の良さと生活面の利便性を享受している日本社会において、危機管理の意識が低下している事実は否めない。

スマホを片手に外出し、公の空間に自分の身を置いているにもかかわらず、メール、SNS、ゲームなどの個的空間に没入し、無防備にも周囲に全く注意を払うことなく、人にぶつかり、自転車、乗用車などの車両と接触寸前の危機に陥り、駅のホームから転倒する事故も多発している現状である。

9. 江戸の親が最初に子どもに教えたこと

江戸の親が最初に子どもに教えたことは危機管理であった。幼い子どもが、温度の高い飲食物を口にするなど熱いと体感するものに接触した際に、瞬時に「熱い」と言葉を発し、自分の感情ならびに意志を他者に表したのならば、その言動は、一人立ちをするサインと見なし、親はその子の自立心が養われ始めたことを喜び祝ったということである。「生きの祝い」という言葉で現代に伝えられている。親が傍に付き添い、常日頃から「それは熱いよ」などと注意を促していたならば、子どもの自立心が養われず、危機管理能力を身に付けることが適わないであろう。

とりわけ危機管理においては、知識や情報として取り入れるだけではなく、自らが体感した事柄の方が圧倒的に会得しやすく、実際の社会生活において有用かつ応用の利くものとなる。江戸では、自らの危機管理が出来ることは「生き」ている証であるとみなされ、江戸ならではの美意識である「いき」の概念に通じ、いきであることの意味するところの一つには、自分の事は自分で出来る、即ち、自分自身で危機管理が出来ている、詰まるところ、自立している人間であることを含有している。

10. 地域コミュニティとしての「講」の役割

江戸の庶民の社会生活における年長者の心得として、人のために先頭に立ち手本を示す生き方が望まれた。「①人をどれだけ笑わせているか。②人をどれだけ立てているか。③人をどれだけ育てているか。④人にどれだけ伝承しているか」が挙げられる。

社会経験を積み、人を導く立場になったならば、自分を育ててくれた人々ならびに地域社会に対し恩返しとして、率先し他者に貢献すべく行動を示すことが当然であると考えられていた。誰もがコミュニティのリーダーとして自覚し、その心意気を周囲が快諾することによりコミュニティが生起し成立していたと言える。その現れとして、相互扶助の組織である「講」というシステムが発達していたのである。

江戸時代の講は、富士山を愛でる「富士講」、あるいは、えびす神、かまど神を祀ることにより五穀豊穡ならびに商売繁盛を祈願する「えびす講」など信仰を中心としたものが一般的に周知されている。しかし、それらはごく一部である。「江戸講」と呼ばれる地域単位で構成された相互扶助組織においては、毎回、江戸の町が発展するうえで必要なもの、改善すべき点を各自が持ち寄り議論し、個々の商売が繁盛し、住みやすく安全の行き届いた町を保持するための知恵を出し合い、助け合いながら実際に必要な行動を実行していたのである。

地震ならびに火事等の災害に備える目的において、ボランティア組織を形成した「なます講」は、「江戸の地震はナマズの天地返し」と言われる所以から、地震を始め、町で頻繁に起こる火事などの災害全般に備え、幕府や公的な機関に頼らずとも、自分たちの身は自分たちで守れるように、自助である危機管理の仕方を常に論議していた。

講は、地域コミュニティの核として、多くの町民の

意思疎通ならびにスムーズなコミュニケーションを成立させるために重要な役割を果たしていたのである。年長者の定義は年齢だけを言うのではなく、地域、職場、家庭、学びの場等、各コミュニティに属し、リーダーとして組織の活性化に尽力する役割を有し、実際にそれを実行している者が評価された。また、老いにより日常生活に不自由が生じた際は、コミュニティによる支援を受けることが可能であった。自助、共助、公助の均衡を取りながら共生社会を培っていった例が、江戸で発達した「講」のシステムに源流として既に存在していたといえる。

尊異論

江戸の庶民の、とりわけ商人の間で不文律として浸透していたとされる「尊異論」という思考がある。地位が高い等、強い立場の者が多数決だけにより物事を決議せず、弱い立場の者や少数派の発言であっても、その内容が優れているならば取り入れ、自分と異なる意見も重んじよという教訓を示している。尊異論は、地域社会において、江戸の本店と呼ばれる豪商をはじめとした大通りに店を構える大規模な商家に限らず、今日の社会生活ならびに地域のコミュニティにおいても、共生社会を構築するうえで必要となる要素である。

1 1. 結論

このように、例に取り上げ述べてきた江戸時代の、とりわけ商人を中心とした庶民の思考法ならびに行動様式には、共生社会を構築するにあたり、傾聴し現代の社会生活に応用し、活用出来る内容が多数散見されている。

前記した現在の社会潮流における2つのベクトルとは異なる、第3のベクトルとなる方向性を探るうえで、江戸の共生社会の在り方は、一つの指針を得ることが可能であると考ええる。

社会情報学においては、新しい民主主義の在り方として「集合知」と「オープン・データ」が提唱されている。※注3

個人主義と見なすことが出来得る第1のベクトルとは異なり、むしろ、公共の知を指向するというのが「オープンサイエンス」の考えであるが、それは単なる研究レベルに留まるのではなく、西垣氏は、インターネット上における集合知によって、新しい民主主義の出現を期待していると受け取ることが出来る。無論、「ネット集合知による民主主義」には、今後に至っても、課題は少なくないことが予想されるが、ひとつの方向性を示唆するものである。

江戸で発達した「講」の思考法を、現代のネット環境においても実現させることは難しくはないと考える。いっそう拡大していくであろうインターネット時代ならではのバーチャルな社会と共存し、共生の行き届いた新たな民主主義を構想し構築するうえでも、その基礎となる、自立した精神から育まれる危機管理能力を個々が身に付け、リアルな空間の実際的な社会生活におけるコミュニティの構築を、同時進行で進めていく必要がある。江戸時代のとりわけ商人を中心とした庶民の思考法ならびに行動様式は、そのための一つの指針となり、現代に応用し活用す

ることが可能であると考ええる。

補注

※1 文部科学省(2012):『共生社会の形成に向けて』

※2 2章-10章の記述における、江戸時代の共生の概念ならびに、江戸時代の人々、とりわけ商人を中心とした庶民の思考法ならびに行動様式、且つそれらを指標に現代の日常に応用すべく心得として体系化したこれらの内容は「江戸しぐさ」とされている。

※3 西垣通(2014):『ネット社会の「正義」とは何か-集合知と新しい民主主義』角川選書

参考文献

- 1) 浜田純一(2014):『社会情報学とは何か』東京大学出版会
- 2) 田中一(2001):『社会情報学』培風館
- 3) 西垣通(2014):『ネット社会の「正義」とは何か-集合知と新しい民主主義』角川選書
- 4) 喜田川守貞, 宇佐美英機校訂(2001):『近世風俗志1~5』岩波文庫
- 5) 山内あやり(2013):『江戸しぐさに学ぶおつきあい術』幻冬舎
- 6) 山内あやり(2013, 8-2014, 7):『江戸しぐさに学ぶビジネスリーダーの流儀』経済界 連載 2013. 9, 11, 12月号